PART 1 全体の調査結果

第1章 幼児の生活

鈴木　尚子

第1節 生活の時間

北京、上海、東京は早寝早起き型である。一方、台北、ソウルは就寝時刻が遅い。どの地域においても、就園児と未就園児の生活パターンには違いがみられたが、通園する施設別に比較した場合には、生活パターンに相違がある地域と相違がない地域がある。

平日朝、起きる時刻

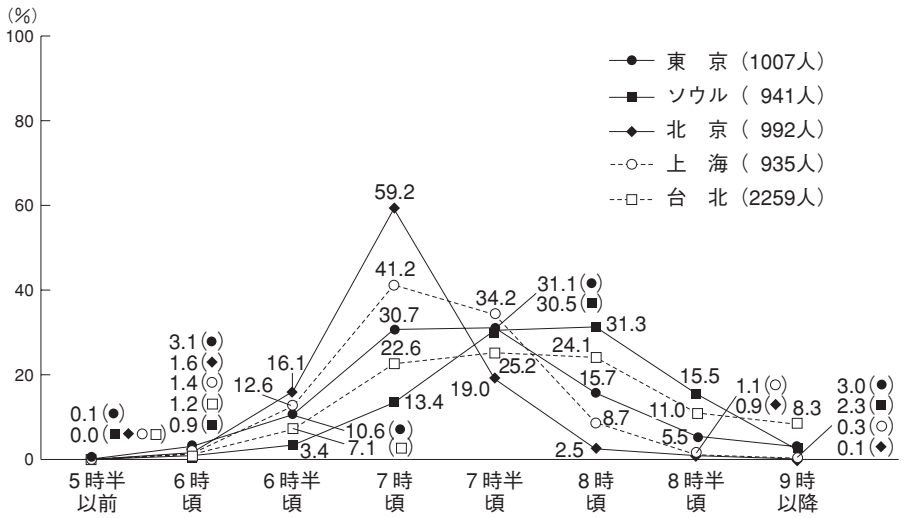
東アジア５都市の３～６歳くらいの子どもは、どんな生活を送っているのだろうか。日本では、昨今、幼児の生活の夜型化や大人化がいわれているが、他の地域の幼児はどうだろう。そこでまず、起床や就寝、食事などの基本的な生活の時間からみてみたい。

北京と上海の子どもの朝は早い。平日朝、何時に起きるかたずねたところ、北京では「７時頃」の早い時間帯に59.2%と半数以上が集中している（**図１－１－１**）。上海は、北京ほどではないが、やはり「７時頃」に起床する子どもが41.2%であり、北京に次ぐ早さだ。

比較的早いと考えられる「７時頃」以前に起床する幼児の割合をみると、北京や上海の早起きが際立つ（**図１－１－２**）。「７時頃」以前に起床する幼児は、北京では76.9%、上海では55.2%と半数を超えている。また、東京では44.5%と比較的早めだが、台北では30.9%、ソウルでは17.7%となっており、都市によって子どもの起床時刻には差があることがわかる。

また、他都市と比べて、起床時刻が「７時頃」の時間帯のほぼ１点に集中しているのは、北京の特徴である。次に早い上海も、ほとんどが「７時頃」または「７時半頃」に集中している。その一方で、他の都市ではそれぞれの時間帯の比率を表す折れ線の山はなだらかで、比較的分散が大きい。

■図１－１－１　平日の起床時刻



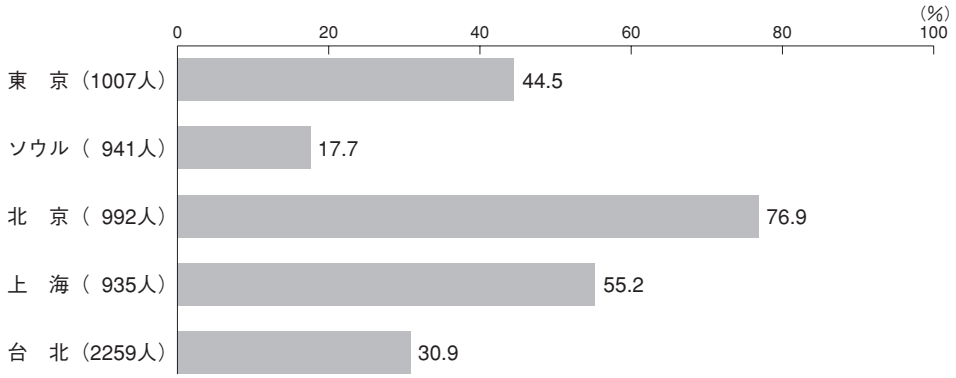
注）無答不明は図から省略した。

食事をする時刻

次に、朝食をとる時刻をみてみよう（**図1－1－3**）。東京の子どもは大体「7時半頃」（31.9%）から「8時頃」（28.4%）に朝食をとる。ソウルの子どもは、それよりも少し遅く、「8時頃」（29.4%）から「8時半頃」（33.5%）の様子だ。北京の子どもはほとんどが「8時頃」（79.0%）にとり、上海では「7時半頃」（47.1%）が半数を占める。台北の子どもは、およそ「7時半頃」（18.6%）から「8時半頃」（21.7%）に分散している。北京の子どもは朝起きる時刻が一番早かったものの、朝食をとる時刻をみると東京や上海のピークよりも遅い「8時頃」に集中している。

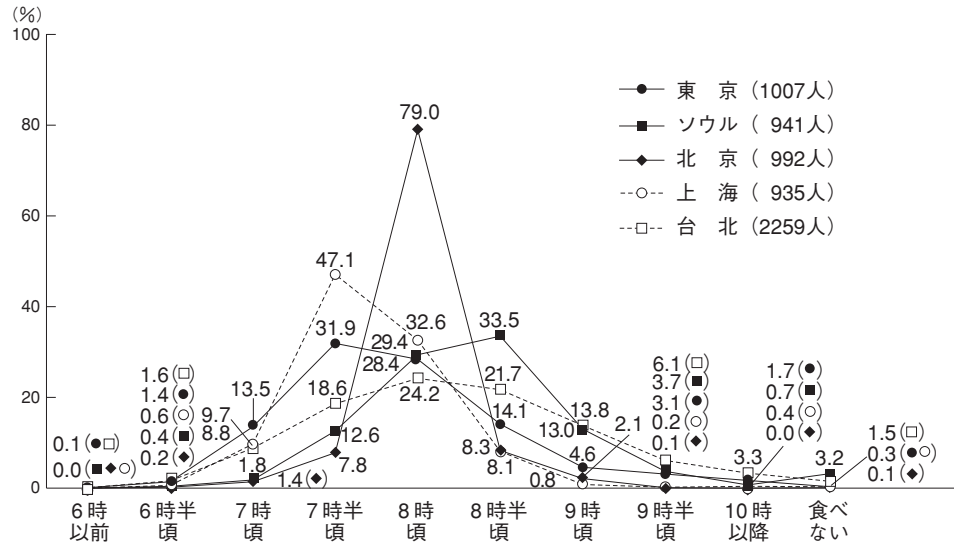
では、夕食の時刻はどうだろうか。夕食をとる時刻を折れ線グラフで表したのが、次の**図1－1－4**である。全体的な分布から傾向

■図1－1－2 「7時頃」以前に起床する幼児



注）「5時半以前」＋「6時頃」＋「6時半頃」＋「7時頃」の%。

■図1－1－3 朝食の時刻



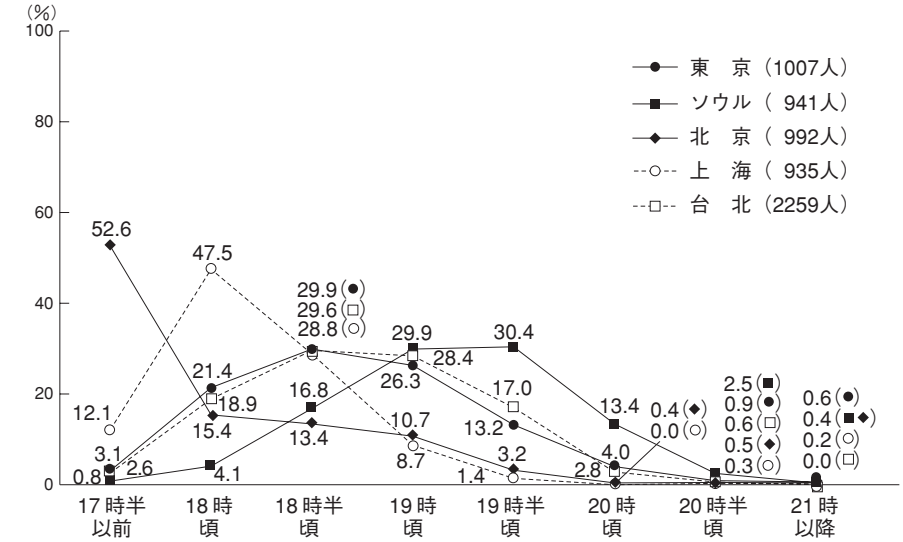
注）無答不明は図から省略した。

をとらえてみると、朝食をとる時刻同様、北京、上海では、時間帯の山が早い時間帯に集中している。北京では約半数（52.6%）が「17時半以前」に、また上海では、約半数（47.5%）が「18時頃」に夕食をとると回答している。東京、台北は「18時頃」から「19時頃」の時間帯に夕食をとる。また、ソウルは「19時頃」から「19時半頃」と相対的に遅めのようだ。

平日の就寝時刻

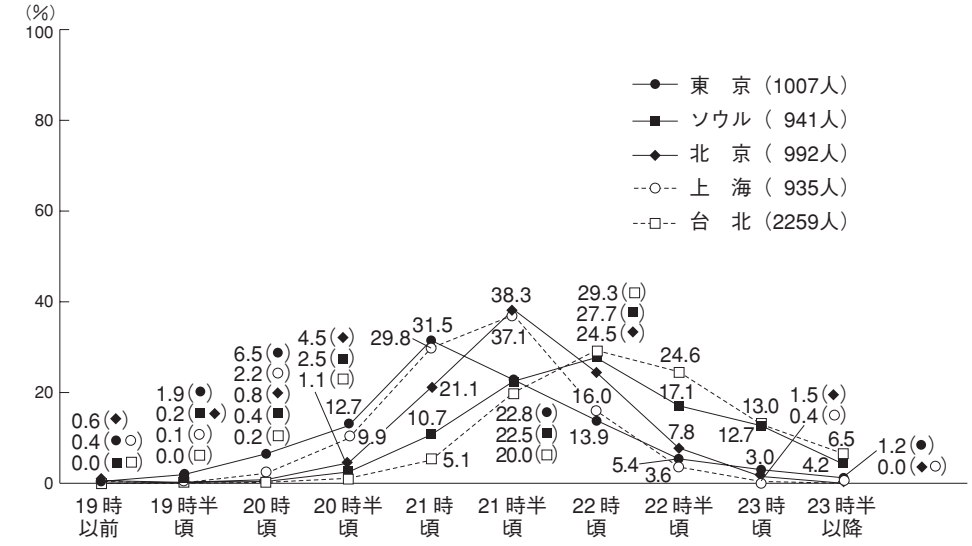
さらに、平日の就寝時刻をみてみよう（**図1－1－5**）。東京の子どもは比較的早寝のようで、「21時頃」に寝る幼児が31.5%と他の時間帯と比較して最も多い。北京、上海は「21時半頃」がピークで（「21時半頃」の比率、北京38.3%、上海37.1%）、ほとんどの子どもがこの時間帯前後に就寝しているようだ。ソ

■図1－1－4　夕食の時刻



注）無答不明は図から省略した。

■図1－1－5　平日の就寝時刻



注）無答不明は図から省略した。

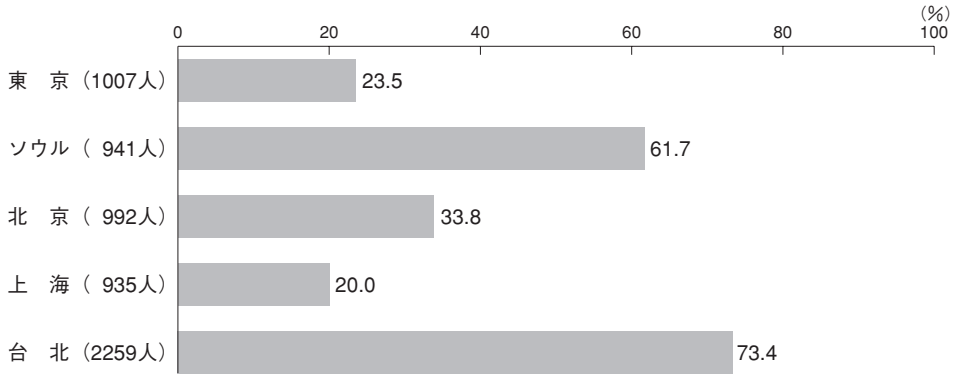
ウルと台北は他の都市に比べて遅寝の様子で、「22時頃」に寝る子どもが最も多い（「22時頃」の比率、ソウル27.7%、台北29.3%）。

「22時頃」以降の比較的遅いと考えられる時間帯に寝る幼児の割合をみると（**図1－1－6**）、ソウルと台北の子どもの遅寝の傾向がさらに顕著にあらわれる。東京、北京、上海がそれぞれ2～3割であるのに対して、ソウル、台北はそれぞれ6～7割と大多数が「22時頃」以降の遅い時間に就寝している。

通園のために家を出る時刻

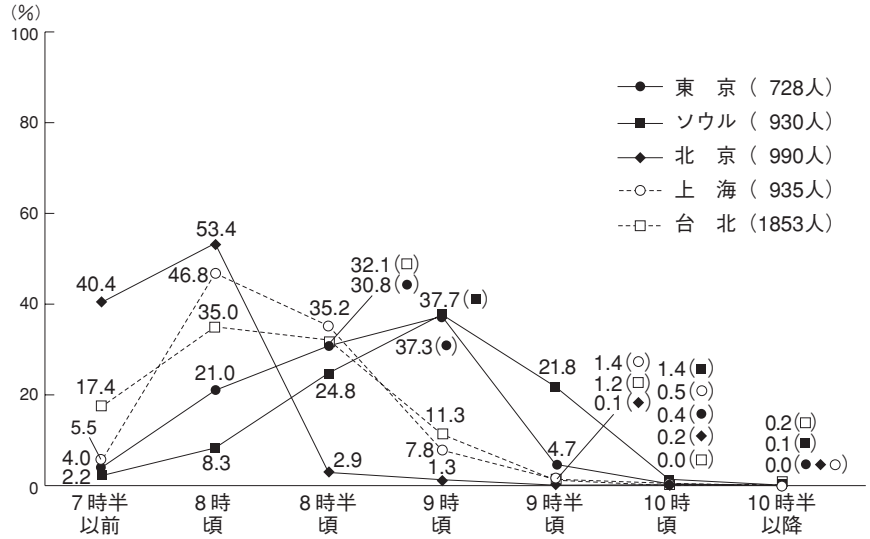
現在、子どもが幼稚園、幼児園、保育園、保育施設、託児所などに通っていると回答した人に対して、通園のために家を出る時刻をたずねた（**図1－1－7**）。子どもが家を出る時刻の分布をみると、都市によるはっきりし

■図1－1－6 「22時頃」以降に就寝する幼児



注）「22時頃」＋「22時半頃」＋「23時頃」＋「23時半以降」の%。

■図1－1－7 家を出る時刻



注1）就園児の保護者の回答のみ分析。
注2）無答不明は図から省略した。

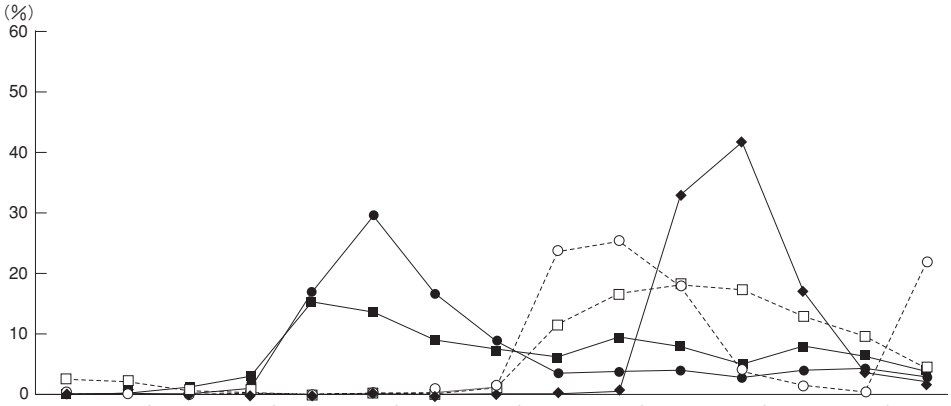
た傾向があらわれている。北京、上海、台北は、比較的早めの様子だ。北京では、「7時半以前」（40.4%）から「8時頃」（53.4%）の早い時間帯に集中している。上海は、「8時頃」が一番多く（46.8%）、次に「8時半頃」（35.2%）である。台北は「7時半以前」（17.4%）、「8時頃」（35.0%）、「8時半頃」（32.1%）に分布している。東京では、「8時頃」（21.0%）、「8時半頃」（30.8%）、「9時頃」（37.3%）に家を出るようだ。ソウルでは「8時半頃」（24.8%）、「9時頃」（37.7%）、「9時半頃」（21.8%）の少し遅めの時間帯に家を出る。

園から家に帰る時刻

家を出る時刻と同様に、就園児の保護者に対して、子どもが家に帰る時刻をたずねた（**図1－1－8**）。家に帰る時刻について、5%以上回答がある時間帯をみると、東京は「14時頃」から「15時半頃」であるが、家に帰る時刻が「16時頃」以降の子どもも30%近くと少なくない。ソウルは、「14時頃」から「18時半頃」のすべての時間帯に分布している。北京は17時台の時間帯に集中しており（74.7%、「17時頃」＋「17時半頃」）、上海はそれよりも1時間ほど早く16時台が多いが（48.9%、「16時頃」＋「16時半頃」）、およそ5人に1人は「19時以降」の遅い時間帯に家に帰っている。台北の就園児も家に帰る時刻は遅めであり、「16時頃」から「18時半頃」に分布している。

このような各都市の子どもの帰宅時刻の違いは、就学前機関の制度の相違も大きいが、保護者の就労状況や家族構成などさまざまな要因による影響も考えなくてはならない。

■図1－1－8　家に帰る時刻



	12時以前	12時半頃	13時頃	13時半頃	14時頃	14時半頃	15時頃	15時半頃	16時頃	16時半頃	17時頃	17時半頃	18時頃	18時半頃	19時以降
東京（728人）	0.1	0.0	0.1	1.0	16.9	29.5	16.7	8.8	3.5	3.8	4.0	2.8	4.0	4.3	2.9
ソウル（930人）	0.0	0.2	1.2	3.0	15.3	13.6	9.0	7.5	6.2	9.5	7.9	5.0	8.0	6.3	3.8
北京（990人）	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	0.5	33.0	41.7	17.0	3.6	2.1
上海（935人）	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	0.3	1.2	23.6	25.3	17.8	3.8	1.5	0.4	21.8
台北（1853人）	2.5	2.1	0.6	0.3	0.0	0.2	0.1	1.1	11.6	16.7	18.1	17.3	12.9	9.6	4.3

注1）就園児の保護者の回答のみ分析。
注2）無答不明は図から省略した。

各都市の幼児の生活パターン

これまでみてきた時間帯別の選択項目を時間に置き換えて、起床、就寝などの平均時刻を計算し、各都市の生活パターンを比較してみよう（**図1－1－9**）。

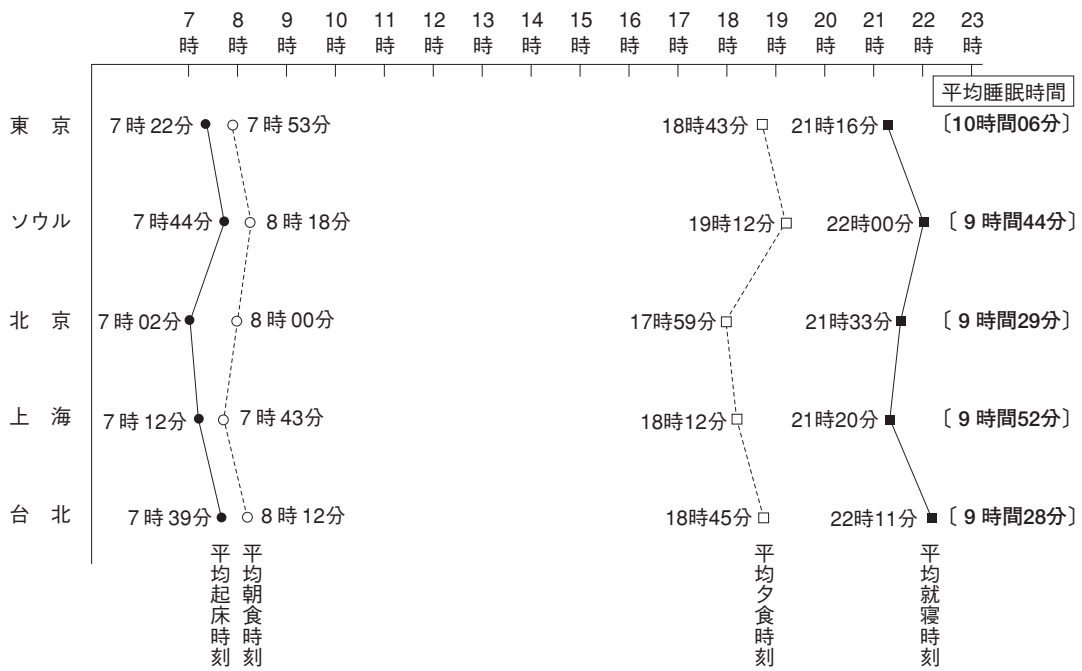
東京の子どもは、平均就寝時刻が21時16分であり、他都市と比較すると早めの就寝といえる。さらに、平均起床時刻が7時22分であり、就寝時刻と起床時刻の差をとって計算した睡眠時間をみると、10時間06分と、他都市と比べた場合に、東京の子どもは睡眠時間が長めのようだ。

北京、上海の子どもは、起床時刻がそれぞれ7時02分、7時12分と非常に早起きだ。睡眠時間は、それぞれ9時間29分、9時間52分である。これらの都市では、夕食の時刻が他都市と比べて早いのが特徴的だ。北京では、朝7時02分に起床するにもかかわらず、ようやく8時00分に朝食をとっている。その間、約1時間、何をしているのだろうか。これは、園に行くために家を出る時刻と合わせてみると合点がいくだろう。詳しくは次の就園状況別の分析で述べるが、北京の幼児園では、朝食を園で食べることが多いためである。

台北の子どもは、平均就寝時刻が22時11分であり、他都市と比較すると遅い。そのため、睡眠時間が9時間28分と短くなっている。

また、ソウルの子どもも平均就寝時刻が22時00分と比較的遅めだ。ソウルの特徴としては、朝食、夕食の時刻が他都市の子どもよりも若干遅い点である（朝食の時刻：8時18分、夕食の時刻：19時12分）。

■図1－1－9　平日の生活時間



注）起床、朝食、夕食、就寝の平均時刻は、「21時頃」を21時、「23時半以降」を23時30分のように置き換えて算出した。また、平均睡眠時間は、就寝時刻と起床時刻から算出した。なお、いずれかの質問に対して無答不明のあった人は分析から除外している。

各都市の幼児の生活パターン（就園状況別）

日本の幼児の起床や就寝などの生活のパターンは、就園しているか否か、また、どんな施設に通っているかなど、就園状況によって大きく異なるということが国内調査の結果の分析から明らかになっている（ベネッセ教育研究開発センター、『第３回幼児の生活アンケート報告書・国内調査』2006）。

就園状況が幼児の生活パターンに大きく影響するという傾向は、国や地域を変えても同様にあてはまるのだろうか。そこで、就園状況別に就寝、起床、食事の生活時間を比較してみた（**図１－１－10**）。就園児については、家を出る時刻と家に帰る時刻も示している。

子どもの通う施設の形態が１つではない、東京、ソウル、台北について、就園状況別のこれらの時間（主に起床時刻、就寝時刻）の違いをみてみよう。

東京では、前述した国内調査の分析で明らかになったとおり、就園状況による生活パターンの差がはっきりしている。起床時刻が遅く（７時49分）、朝食の時刻も遅いのが東京の未就園児の特徴だ。また、就寝時刻が未就園児、幼稚園児よりも遅く、起床時刻が早いため、睡眠時間が短い（９時間19分）のが東京の保育園児の特徴だ。就園児の在園時間を比べると、幼稚園児６時間02分、保育園児９時間22分と、３時間20分の差がみられた。

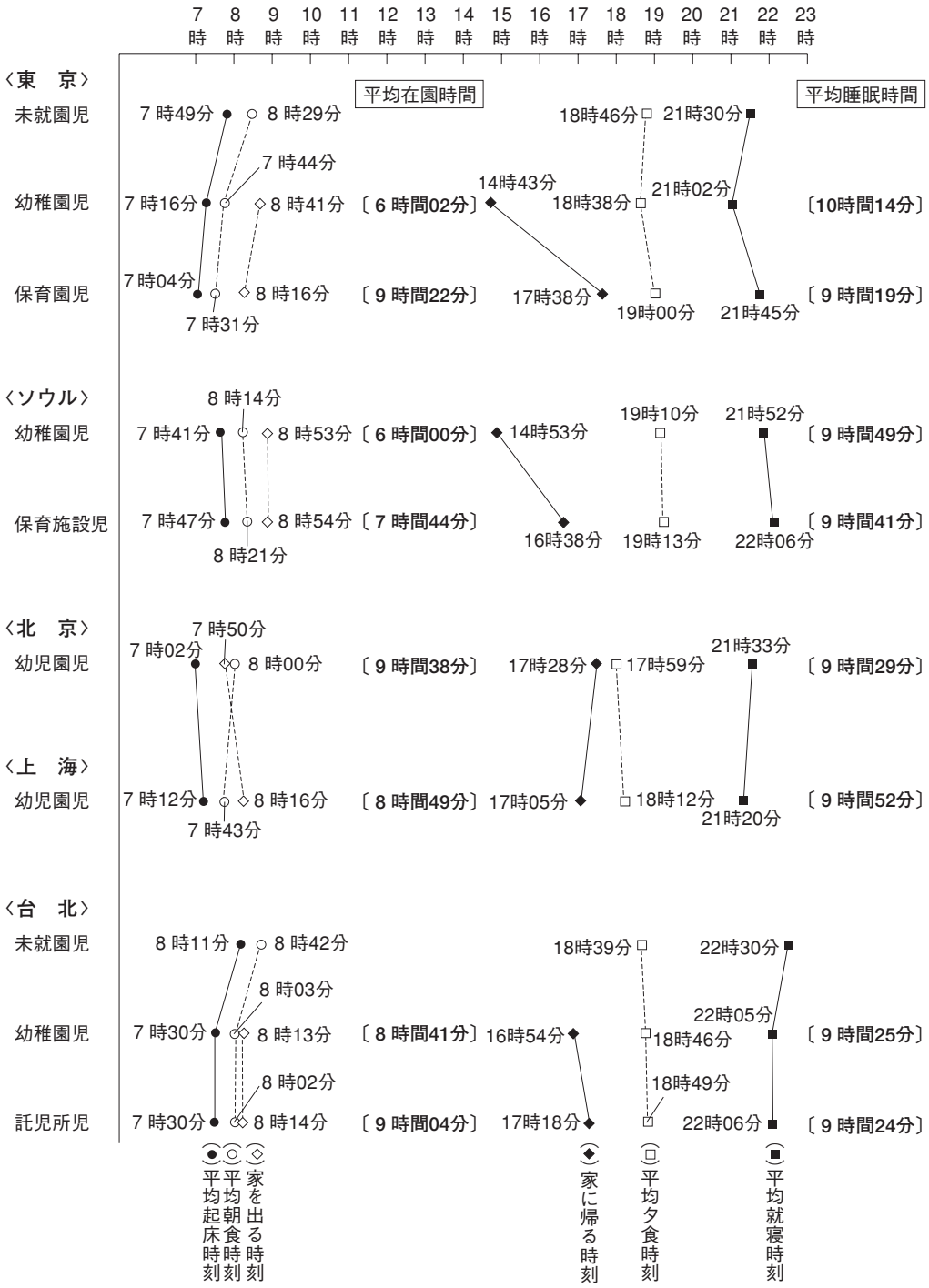
ソウルでは、園を通した調査となっているため、実際にはソウルの３～６歳の３割程度にあたる未就園児のサンプルが含まれていない。幼稚園児と保育施設に通う幼児を比べてみよう。幼稚園児も保育施設に通う幼児も在園時間の相違こそあるものの（平均在園時間、幼稚園児：６時間00分、保育施設児：７時間44分）、起床や就寝、朝食や夕食の時刻については、大きな差異がみられない。

園へ行くために家を出る時刻と朝食の時刻を合わせて図に示すと、北京では、これらの時刻に逆転の現象が起こっていることがわかる。北京では、多くの幼児園で３食を用意しているためである。したがって、幼児園に着いてから、朝食をとるのが一般的なようである。

台北についても、幼稚園児と託児所へ通う幼児では、あまり大きな差がみられない。在園時間は幼稚園児８時間41分、託児所児９時間04分と23分の差があるにすぎない。起床や就寝、朝食や夕食の時刻もほぼ同時刻といえる。一方、就園児と未就園児では、生活パターンに違いがみられた。就園児は他の都市より遅めではあるが、22時05分頃には就寝するのに対し、未就園児は22時30分とさらに夜更かしであるようだ。また、起床時刻も就園児が７時30分であるのに対し、未就園児は８時11分と遅い。

東京でも台北でも就園児と未就園児には、就寝や起床、食事などの生活パターンに違いがみられた。さらに、就園児のうち、幼稚園へ通う幼児と保育園（または保育施設、託児所）に通う幼児を比較すると、東京では通う施設の形態によって在園時間に大きな差がみられ、生活パターンにも違いがみられた。ソウルでは、通う施設の形態によって在園時間には差がみられたものの、生活パターンには差がみられない。台北では、在園時間にはほとんど差がみられず、生活パターンにもまったく差がみられない。

■図１－１－10　平日の生活時間（就園状況別）



注１）起床、朝食、夕食、就寝、家を出る、家に帰る時刻は、「21時頃」を21時、「23時半以降」は23時30分のように置き換えて算出した。平均睡眠時間は、就寝時刻と起床時刻から算出した。また、平均在園時間は家を出る時刻と家に帰る時刻から算出したため、通園時間を含む。なお、いずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。

注２）家を出る時刻、家に帰る時刻は、就園児の保護者の回答のみ分析。

第2節 習い事・おけいこ事・家庭教師

東京の子どもはスポーツ系の習い事、北京、上海、台北の子どもは芸術系の習い事、ソウルの子どもは学習系の習い事をする傾向が高い。また、英会話などの語学を習う子どもは、どの地域でも一定の高い割合を占めている。

幼児の幼稚園、保育園以外の活動も、地域によってさまざまである。本節では、各都市の習い事事情をみてみたい。

習い事・おけいこ事（ソウル：課外活動、北京・上海：課外興趣班、台北：才藝班）といっても、主に先生がいる場所へ行って何かを学ぶというのが日本における一般的なイメージだろうが、他の都市のイメージはこれからは離れているようだ。たとえば北京、上海では、幼児園内で在園時間に習い事のオプションが用意されており、そこから親が選択するという形態が一般的なようである。また絵画を習う子どもは、他の子どもが自由に遊んでいるなかでも、遊びの輪から離れて、他の絵画を習う子どもと一緒に園内で絵画を習うという。ソウルでは、ブロック、ガーベ（恩物）などの遊び方や学習誌の内容を教えに家庭教師が家に来ることが一般的であり、習い事（課外活動）として認識されている。このように、習い事・おけいこ事（以下、習い事）は地域によってイメージされるものが異なることに注意しながら調査結果をみなければならない。

また、今回の調査を設計する際には、各都市における習い事の事情に十分注意を払いながら習い事の内容を取捨選択した。そのため、ソウルでは「学習誌」「ガーベ」「ブロック」「学院」「モンテッソリ」、北京、上海、台北では「囲碁教室」などが加わっている。

はじめに、習い事の内容を1つでも選択した割合をみてみると（**表1－2－1**）、この年齢の幼児はどの地域でも半数以上が習い事をしている。子どもの年齢別にみると、ソウルや上海では、3歳という早い段階から習い事を始めている比率が高い（ソウル60.3%、上海56.1%）。一方、北京、台北ではだいたい3歳児（北京34.1%、台北25.0%）と4歳児（北京63.7%、台北51.3%）の間で習い事の比率が急増しており、4歳児くらいから大半が習い事を始めるといえそうだ。東京では、4歳児でもすでに47.9%と2人に1人が習い事をしているが、5歳児では22.3ポイント増加し70.2%となるなど、習い事をする幼児は5歳児くらいの年齢で大幅に増えている。

■表1－2－1　習い事をしている幼児（全体　子どもの年齢別）

（%）

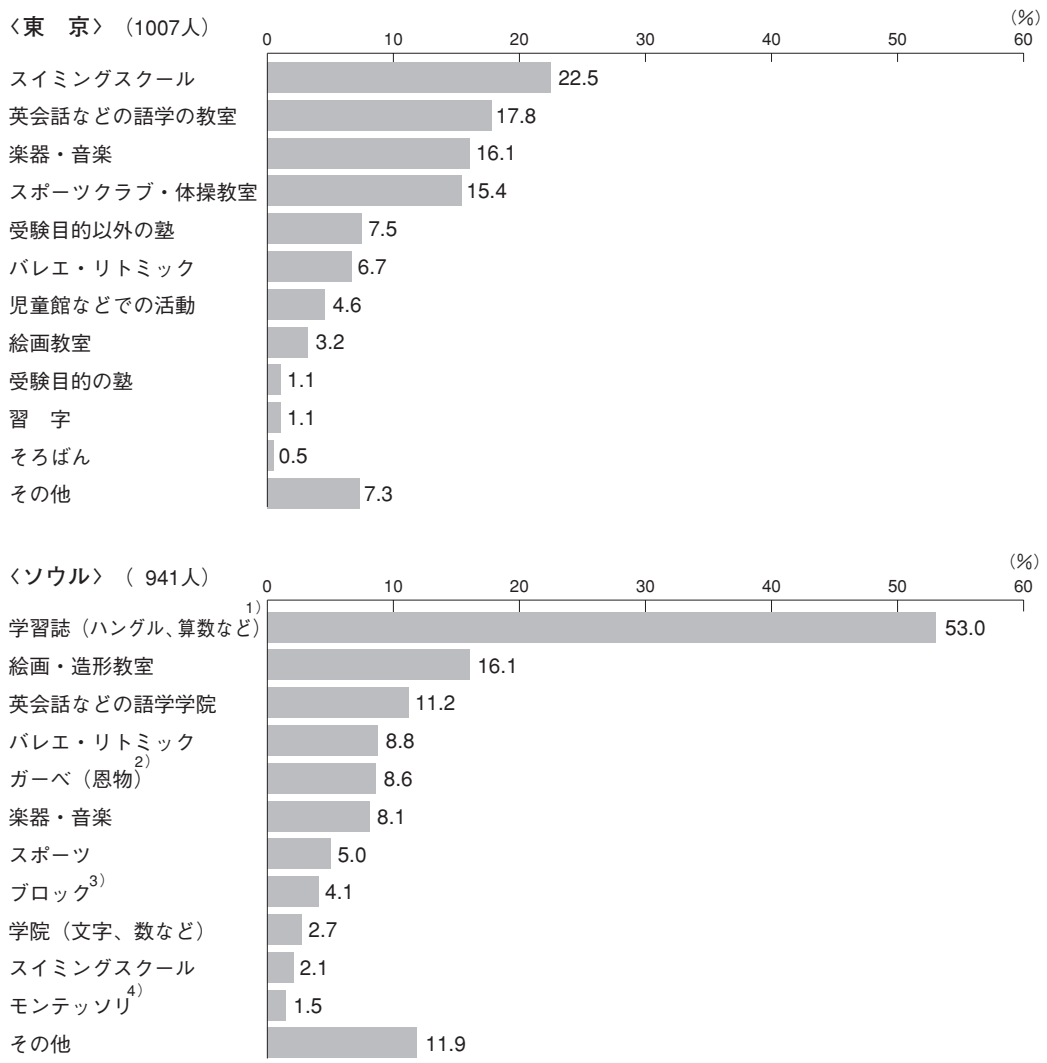
	東　京	ソウル	北　京	上　海	台　北
全　体	61.7（1007人）	72.6（941人）	64.6（992人）	78.4（935人）	56.4（2248人）
3歳児	43.9（ 279人）	60.3（168人）	34.1（193人）	56.1（164人）	25.0（ 180人）
4歳児	47.9（ 247人）	67.2（318人）	63.7（349人）	77.4（304人）	51.3（ 757人）
5歳児	70.2（ 260人）	78.8（386人）	75.4（330人）	89.0（301人）	71.5（ 648人）
6歳児	84.7（ 221人）	84.0（ 69人）	85.0（120人）	91.0（166人）	77.8（ 663人）

注1）「その他」を含むいずれかの習い事を1つでも選択した人の比率。
注2）網掛けは、年齢別にみたときに50%を超えていることを示す。

さらに、都市ごとにどんな習い事をしているのか詳しくみてみよう（**図1－2－1**）。東京では、「スイミングスクール」（22.5%）、「英会話などの語学の教室」（17.8%）、「楽器・音楽」（16.1%）の順に高くなっている。この後に「スポーツクラブ・体操教室」が続くなど、スポーツ系の習い事の比率が高い。

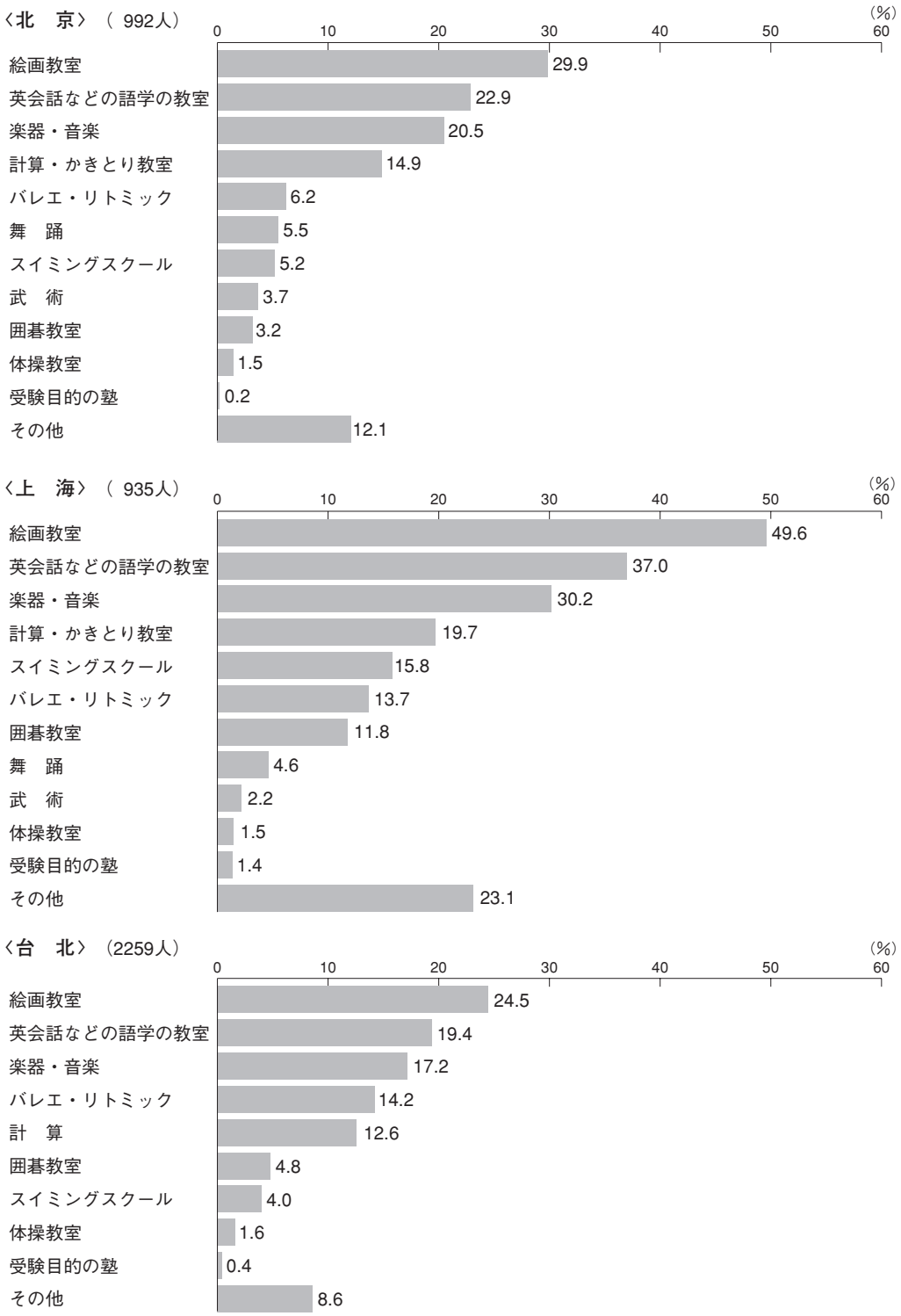
ソウルでは、「学習誌」（53.0%）、「絵画・造形教室」（16.1%）、「英会話などの語学学院」（11.2%）の順に高くなっている。とくに「学習誌」は他の習い事と比べて、とびぬけて高い様子だ。

■図1－2－1　習い事の内容



注1）複数回答。
注2）一部の項目は略記している。詳細は「調査票見本」（p.157）を参照のこと。
注3）韓国は就学前の幼児向け教育教材・玩具が充実しており、幼稚園・保育施設・学院（ハゴン）などの施設や一般家庭で多く利用されている。なかでも、1)学習誌：ハングル・算数・英語などの学習誌や教材のセット、2)ガーベ（恩物）：ドイツの教育者であるフレーベルが1837年に幼児教育に必要な遊具として考案した、一連の教育玩具の総称、3)ブロック：「レゴ」や「ブロックピア」を使ったブロック遊び、4)モンテッソリ：イタリアの教育者であるモンテッソリが考案した一連の教具を使ったモンテッソリ教育など専門の講師による訪問授業のサービスも提供していることが多い。

■図１－２－１　習い事の内容　〔続き〕



注１）複数回答。
注２）一部の項目は略記している。詳細は「調査票見本」（p.157）を参照のこと。
注３）北京・上海の習い事について、「その他」の具体的内容に「舞踊」「武術」が多く含まれていたため、項目として取り出して集計している。

韓国の習い事はどれも、日本で一般的な習い事とは異なるため、今回の調査では頻度や費用などについて、さらに詳しくたずねている。それぞれの習い事の学習時間、頻度、費用をみてみよう（**表1－2－2**）。「学習誌」は、「教材セット＋訪問授業」のようにイメージするのが適当で、学習誌の内容は、ハングル、計算、英語が主である。１回あたりの平均学習時間はおよそ30分で、頻度は平均週に１、２回くらいであるという。費用は月５万ウォン（5,781円）と、他の習い事と比較すれば高くなく、経済的にも手軽な習い事のようである。

「絵画・造形教室」は平均頻度がおよそ週に２回で、１回あたりの平均学習時間は１時間程度、平均費用は6,406円だ。これもソウルでは比較的普及している（16.1%）習い事といえそうだ。

平均費用が一番高く、10万ウォン（11,376円）にもなるのは、「英会話などの語学学院」である。費用の高さもあってか、学院で英語を習う子どもは１割くらいだ。子どもに英語を学習させたいものの、このように高い費用を払うことができない保護者は、上記の「学習誌」で英語を習っているのかもしれない。

「ガーベ」は、週40分前後のわりには、平均費用も６万5,000ウォン（7,694円）と高めである。それに対して「ブロック」は、週50分くらいで、平均費用は３万5,000ウォン（4,271円）で、比較的手頃な習い事といえるが、習っている子どもは全体の５％にも満たず、あまり多くない。「ガーベ」「ブロック」「モンテッソリ」などの習い事は、一部の限られた子どもが習うものであるといえそうだ。

ソウルでは、習い事としてはハングル、計算、英語などを習うために、「学習誌」、つまり「教材セット＋訪問授業」という形態が圧倒的な支持を得ているということが明らかになった。さらにいえば、この形態でさまざまな領域をカバーできるほど、「学習誌」＝「教材セット＋訪問授業」が発達しているということにも、ソウルの習い事事情の大きな特徴を見いだせるのではないだろうか。

北京では、「絵画教室」（29.9%）、「英会話などの語学の教室」（22.9%）、「楽器・音楽」（20.5%）の順に高くなっている。芸術系の習い事が多いようだ。

■表１－２－２　ソウルの習い事

	サンプル数	平均学習時間（分／１回）	平均頻度（回数／週）	平均費用（ウォン／１か月）	平均費用（円／１か月）
学習誌	414	25.7	1.71	49,838	5,781
絵画・造形教室	127	59.7	1.96	55,220	6,406
英会話などの語学学院	90	44.9	1.81	98,073	11,376
ガーベ（恩物）	78	42.4	1.06	66,330	7,694
ブロック	28	53.0	1.03	36,822	4,271
モンテッソリ	9	30.6	1.08	50,931	5,908

注１）無答不明の人は分析から除外している。
注２）平均費用（円／１か月）は１ウォン＝0.116円　（2005年12月13日現在）として算出した。

上海では、北京と同様に「絵画教室」(49.6%)、「英会話などの語学の教室」(37.0%)、「楽器・音楽」(30.2%)の順に高くなっている。上海でも芸術系の習い事が多いようだ。

さらに台北も、北京・上海と同様に「絵画教室」(24.5%)、「英会話などの語学の教室」(19.4%)、「楽器・音楽」(17.2%)の順に高くなっている。中華圏の3都市ではいずれも、絵画、音楽などの芸術系が高い様子だ。

上海では、いずれの習い事についても「している」比率が高い。実際、習い事の平均数をみると、上海では2つ以上と一番多く、反対に台北は一番少ない(図表省略)。

また、いずれの都市でも共通して上位3位までに入る習い事は、「英会話などの語学の教室」である。「英会話などの語学の教室」に低年齢のうちから親が通わせる状況は、東京のみならず、東アジアの各都市にも共通しているようだ。「英会話などの語学の教室」について、年齢別にみたのが**表1−2−3**である。上海では、5歳児から40%を超えており、6歳児ではおよそ2人に1人が英語などの語学を学ぶなど、非常に低年齢のうちから広く普及しているようである。また、北京においても英語などの語学を学ぶ比率は6歳児で30%を超えている。台北でも30%には満たないものの、6歳児では28.6%と4人に1人以上が学んでいることがわかる。なお、ソウルでは先にみた通り、語学学院に通う費用が高額であるためか相対的に比率が低くなっているが、語学学院に通わずとも、「学習誌」(とそれに伴う訪問の家庭教師)などによって英語を学んでいる幼児は多いものと推察される。

東アジアの幼児の英語学習状況について経年で比較したデータはないものの、この地域の英語熱は就学前の幼児にも及んでいるうえ、上海にみるように開始時期が早期化しているようだ。

さらに、各都市の大まかな傾向をつかむために、「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「バレエ・リトミック」「武術」をスポーツ系、「受験目的の塾」「受験目的以外の塾」「英会話などの語学の教室」「学習誌」「学院」を学習系、「楽器・音楽」「絵画教室」を芸術系として、各グループ最低1つ選んだ比率を次の**図1−2−2**に表した。スポーツ系の習い事を選択する比率は、東京が39.0%と一番高い。学習系を選択する比率は、ソウルが58.6%と一番高く、次に上海(45.3%)が続く。芸術系は上海が63.2%と一番高い。このように分類してみると、都市による習い事の選好にはそれぞれの特色があることがわかる。

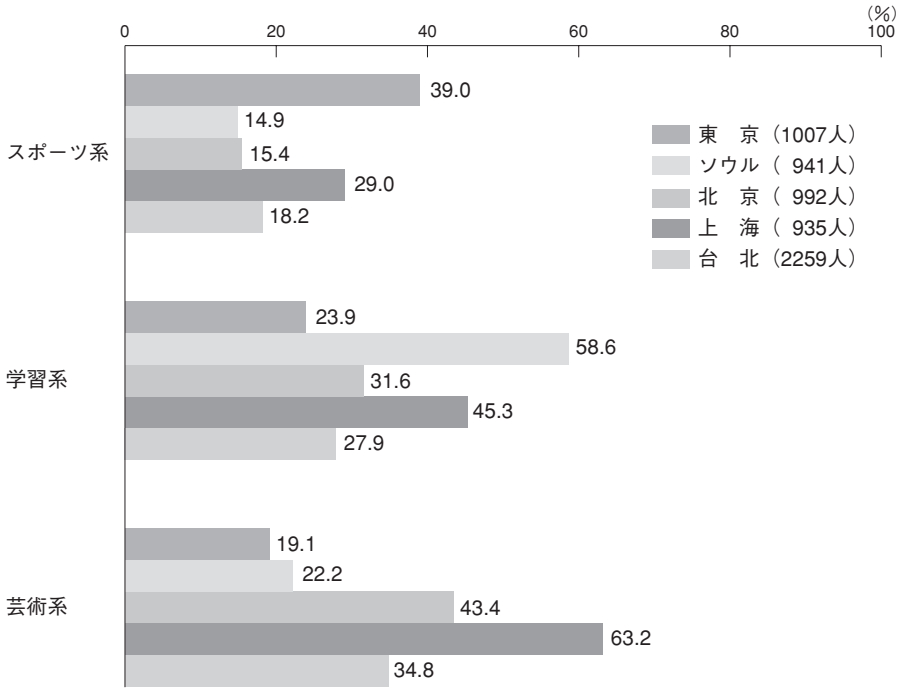
■表１－２－３ 「英会話などの語学の教室」の割合（全体　子どもの年齢別）

（%）

	東　京	ソウル	北　京	上　海	台　北
全　体	17.8（1007人）	11.2（941人）	22.9（992人）	37.0（935人）	19.4（2259人）
3 歳児	9.9（ 279人）	6.1（168人）	13.4（193人）	26.1（164人）	8.2（ 182人）
4 歳児	16.7（ 247人）	6.6（318人）	21.8（349人）	29.3（304人）	17.2（ 760人）
5 歳児	22.1（ 260人）	16.3（386人）	24.6（330人）	43.5（301人）	23.6（ 648人）
6 歳児	22.4（ 221人）	15.9（ 69人）	31.9（120人）	48.9（166人）	28.6（ 669人）

注１）薄い網掛けは、年齢別にみたときに20%を、濃い網掛けは30%を超えていることを示す。
注２）ソウルは「英会話などの語学学院」の割合。

■図１－２－２　習い事の内容（種類別）



注）スポーツ系は、「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「バレエ・リトミック」「武術」から最低１つ、学習系は、「受験目的の塾」「受験目的以外の塾」「英会話などの語学の教室」「学習誌」「学院」から最低１つ、芸術系は、「楽器・音楽」「絵画教室」から最低１つを選んだ比率。

第3節 家にあるもの

「絵本」はどの都市でも使用頻度が高いが、「ワーク」や「ＣＤ」「パソコン」などは都市によって家にある割合も使用頻度もさまざまだ。「テレビ」や「DVD（VCD）」を見る頻度は東京が３時間台、ソウルと台北が２時間台、北京と上海では１時間台と都市によって大きく異なる。就園状況別にみても、この傾向はあてはまる。

玩具や教具

さらに子どもがいる家にある玩具や教具などをみてみよう。北京や上海では、このように細かな質問紙調査にあまりなじみがないせいか、無答不明の割合が項目によっては20%以上に達するなどと非常に高かった（p.170 基礎集計表）。そこで、当該部分については無答不明を除いてそれぞれの玩具や教具の使用頻度を算出した。各項目ごとに、子どもの使用頻度をみてみよう（**図１－３－１**）。

「絵本」は、どの都市においても使用する頻度が高く、「ほとんど毎日」＋「週に３～４日」の割合は７～８割である。一番使用頻度が高いのはソウルの81.4%（「ほとんど毎日」＋「週に３～４日」、以下同様）、低いのは上海の67.6%である。

「ワーク」の使用頻度は都市によって異なる。台北では、ほとんどの家に「ワーク」があるうえに、使用頻度も高い（49.5%）。東京では５人に１人が「ワーク」は「家にない」と回答しており、使用頻度も高いとはいえない（16.7%）。北京、上海では、ほとんどの家にあるものの、使用頻度には個人差があるようだ。

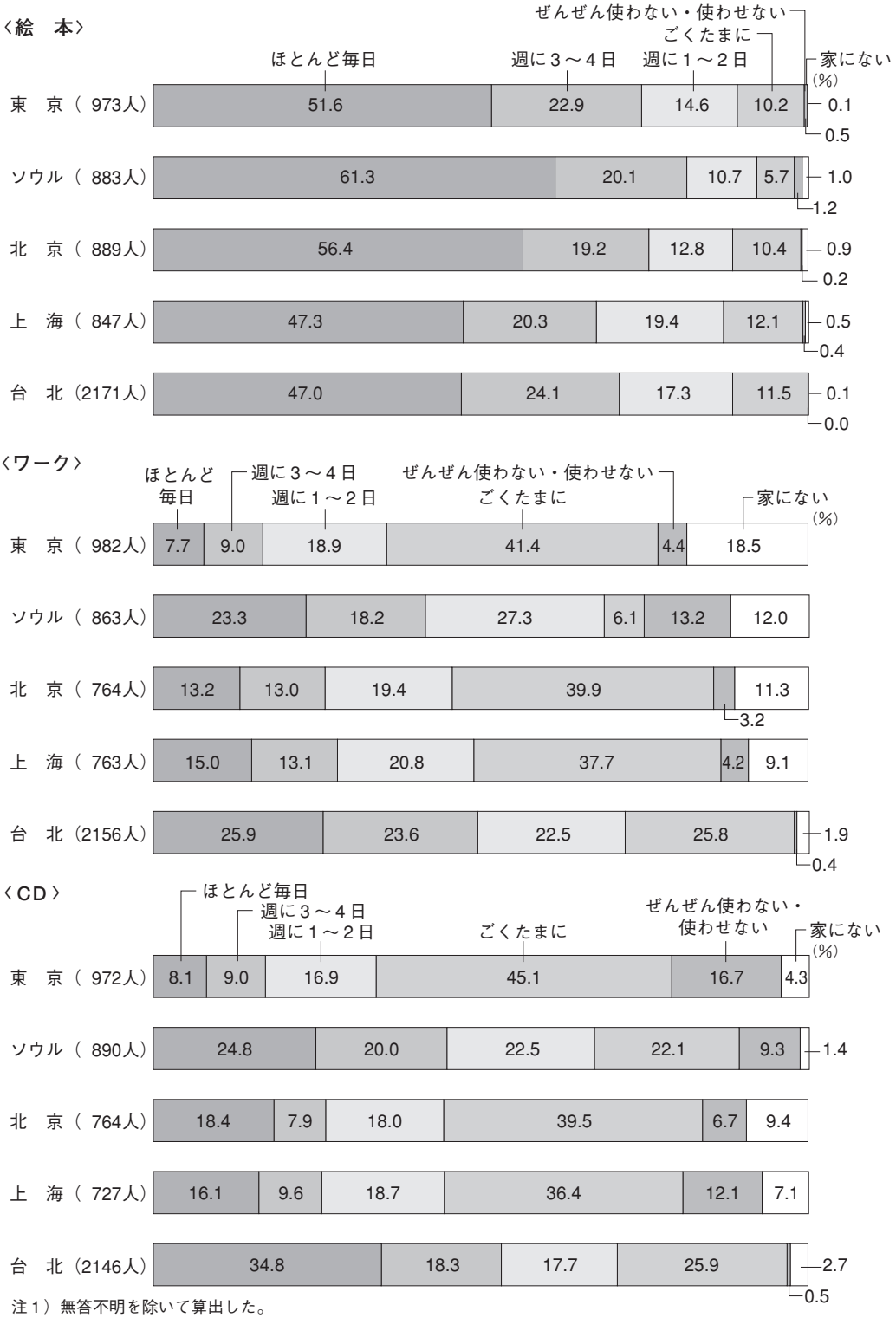
「CD」も、都市によって使用頻度が異なる。台北、ソウルでは比較的使用頻度が高く（53.1%、44.8%）、東京では家にはあっても子どもの使用頻度はそう高くないようだ（17.1%）。

「テレビゲーム」（ソウルでは「ゲーム」の使用頻度をたずねているため、意味するものが異なる）の使用頻度をみると、この年齢の子どもがいる家庭では、「テレビゲーム」自体が家にないということも珍しくはないようで、どの都市でも、普及は５～６割にとどまる様子だ。また、いずれの都市でも使用頻度は高くない。そのなかでも使用頻度が比較的高いのは、東京の子どもであり、およそ10人に１人が週３～４日以上、５人に１人が週に１日以上遊んでいるようだ。

「パソコン」についてみてみると、「パソコン」が一番普及しているのはソウルであり、ほとんどの家にあるうえ、就学前の子どもでも５人に１人が毎日、また６割が週に１日以上「パソコン」に触れている。反対に一番利用していないのが東京のようだ。家にある比率は東京が一番低く、また、使用頻度も低い。

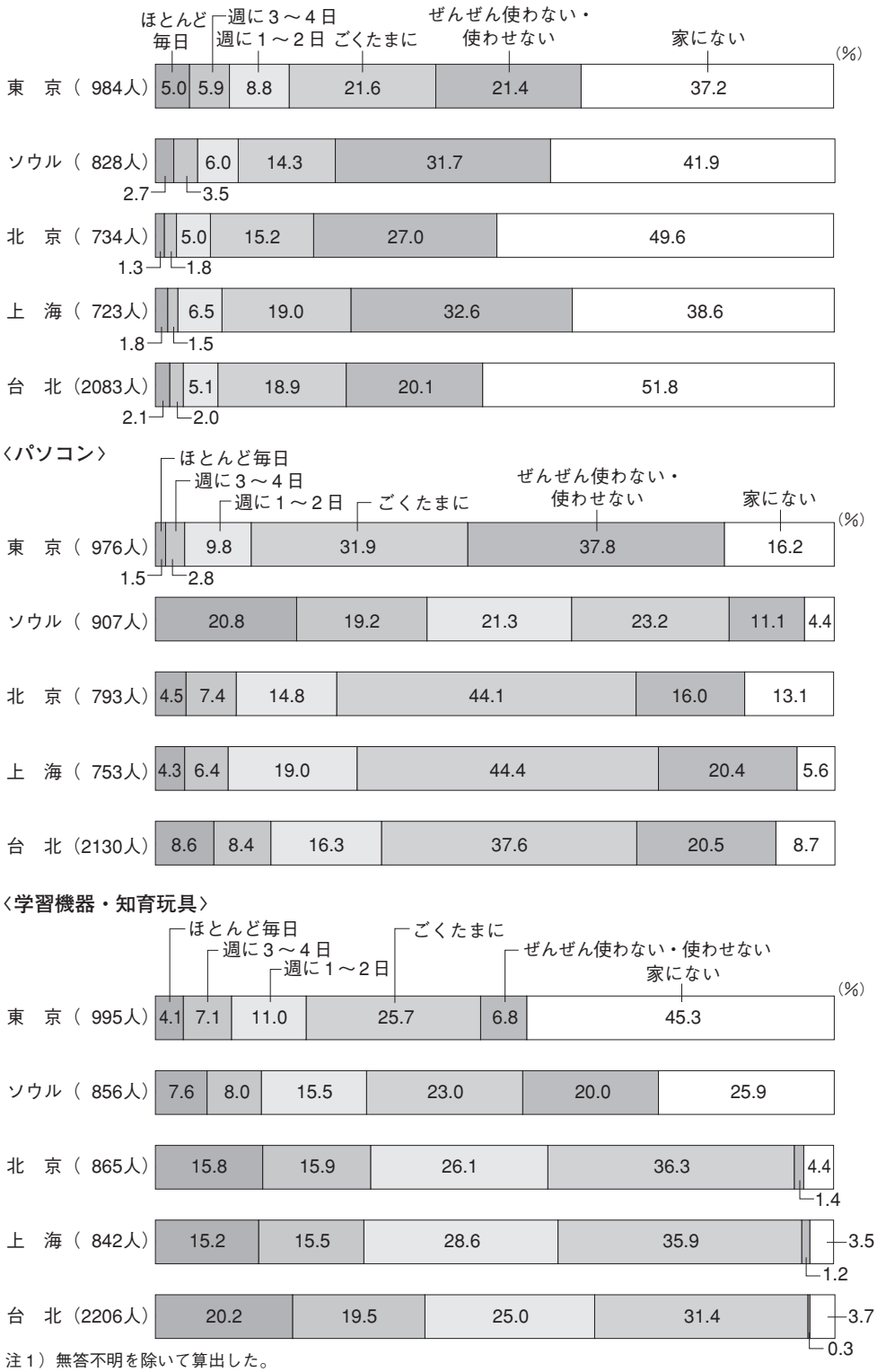
「学習機器・知育玩具」をみると、台北、北京、上海では家にある比率が高く、かつ、使用頻度も比較的高い（39.7%、31.7%、30.7%）。一方、東京では半数近くが「家にない」と答え、使用頻度も低い（11.2%）。ソウルも東京に次ぐ使用頻度の低さである（15.6%）。

■図１－３－１　家にあるものの使用頻度



注１）無答不明を除いて算出した。
注２）「ワーク」について、ソウルでは「学習誌」となっている。ここでの「学習誌」は習い事としての家庭訪問教師が指導する学習誌や家族の人が市販のものを購入し、子どもに家で取り組ませる学習誌を含む、広い意味での学習誌を指している。
注３）「CD」について、ソウル、北京、上海、台北では、「ラジカセ（CD）」となっている。

■図１－３－１　家にあるものの使用頻度 〔続き〕



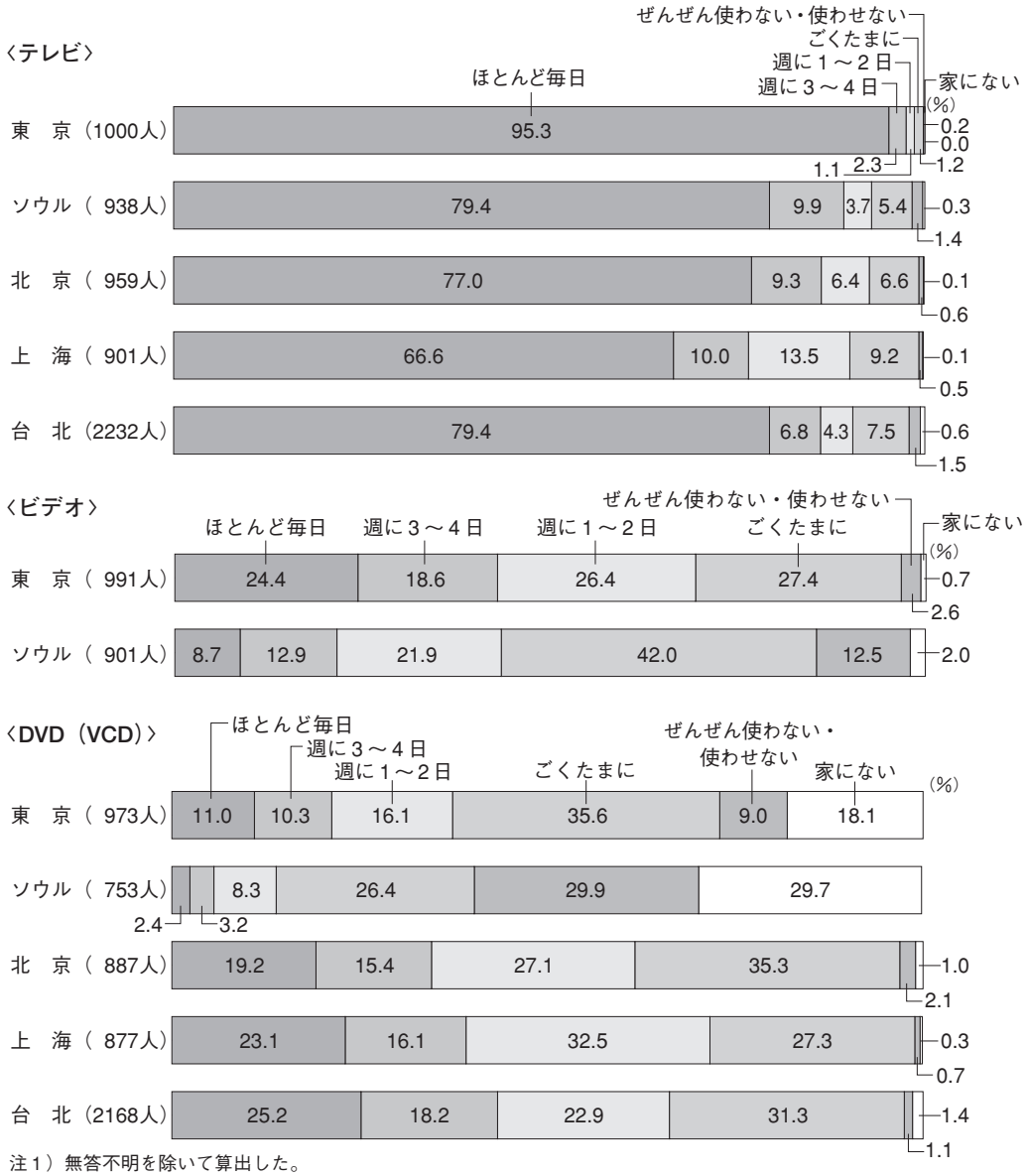
注１）無答不明を除いて算出した。
注２）「テレビゲーム」について、ソウルでは「ゲーム」となっている。
注３）「学習機器・知育玩具」について、北京、上海、台北では「学習用教具・知育玩具」となっている。

テレビ・ビデオ・DVD（VCD）

次に、テレビやビデオ、DVD（VCD）の使用頻度をみてみよう（**図1－3－2**）。東京はテレビを視聴する頻度が一番高く、ほとんどの子どもが「ほとんど毎日」見ているという。「週に3～4日」を合わせると97.6%である。それにソウル89.3%、台北86.2%が続く。

北京、上海、台北ではビデオはあまり一般的ではなく、DVDやVCD（ビデオCD）の普及が進んでいることから、これらの地域ではビデオの質問項目を設けていない。東京、ソウルのビデオに代わるものと考えていいだろう。ビデオの使用頻度をみると、東京では4割が週に3日以上使用しており、7割が週に1日以上使用している。ソウルでは東京よりも使用頻度が低い。

■図1－3－2　テレビ・ビデオ・DVD（VCD）の使用頻度



注1）無答不明を除いて算出した。
注2）北京、上海、台北ではビデオの使用頻度をたずねていない。
注3）「DVD（VCD）」について、東京では「DVD」となっている。

テレビ・ビデオ・DVD（VCD）視聴時間をみると（**図１－３－３**）、都市による平均視聴時間の長短が明確に現れる。一番長いのは東京の３時間43分、次に２時間台の台北２時間50分、ソウル２時間34分と続く。北京、上海は１時間台で、それぞれ１時間46分、１時間43分である。

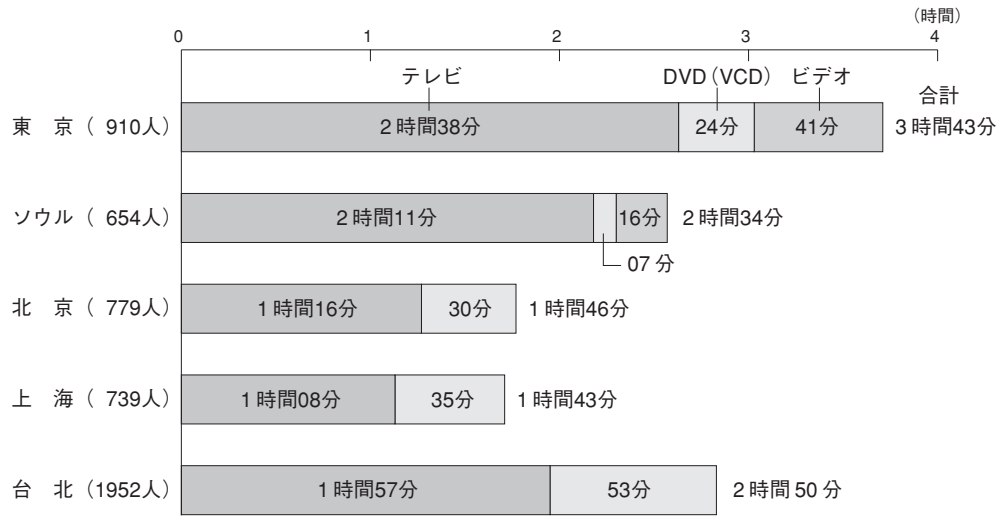
テレビ視聴時間は子どもの在宅時間とも関係があるだろう。国内調査でも在宅時間の長い未就園児は在宅時間の短い就園児よりも視聴時間が長いことが指摘されている。そこで、子どもの就園状況別に平均視聴時間を算出した（**図１－３－４**）。

東京の子どもは、就園児よりも未就園児の視聴時間が１時間ほど長い。台北の未就園児についても、就園児よりも視聴時間が１時間30分ほど長く、ほぼ４時間である。どの都市でも在宅時間が長い未就園児はテレビ視聴時間が長くなる傾向にあるようだ。

各都市において在園時間が一番長い、東京の保育園児（在園時間９時間22分）、ソウルの保育施設児（同７時間44分）、北京の幼児園児（同９時間38分）、上海の幼児園児（同８時間49分）、台北の託児所児（同９時間04分）について、平均視聴時間を比較してみた。東京の保育園児は平均視聴時間が３時間16分、ソウルの保育施設児が２時間39分、北京の幼児園児が１時間46分、上海の幼児園児が１時間43分、台北の託児所児が２時間31分である。このように比べてみると、ソウルと台北は２時間半くらい、北京と上海は１時間45分くらいであるのに対して、東京は在園時間が長い保育園児でさえも１日平均３時間16分と他都市よりも際立って長い。

視聴時間に占めるビデオ・DVD（VCD）の比率を計算すると、東京29.1%、ソウル14.9%、北京28.3%、上海34.0%、台北31.2%となり、ソウルではビデオやDVD（VCD）よりもテレビを見る比率が他都市よりも高いのが特徴的である。ソウル以外の都市では、テレビとビデオ・DVD（VCD）の比率はおよそ７対３のようだ。

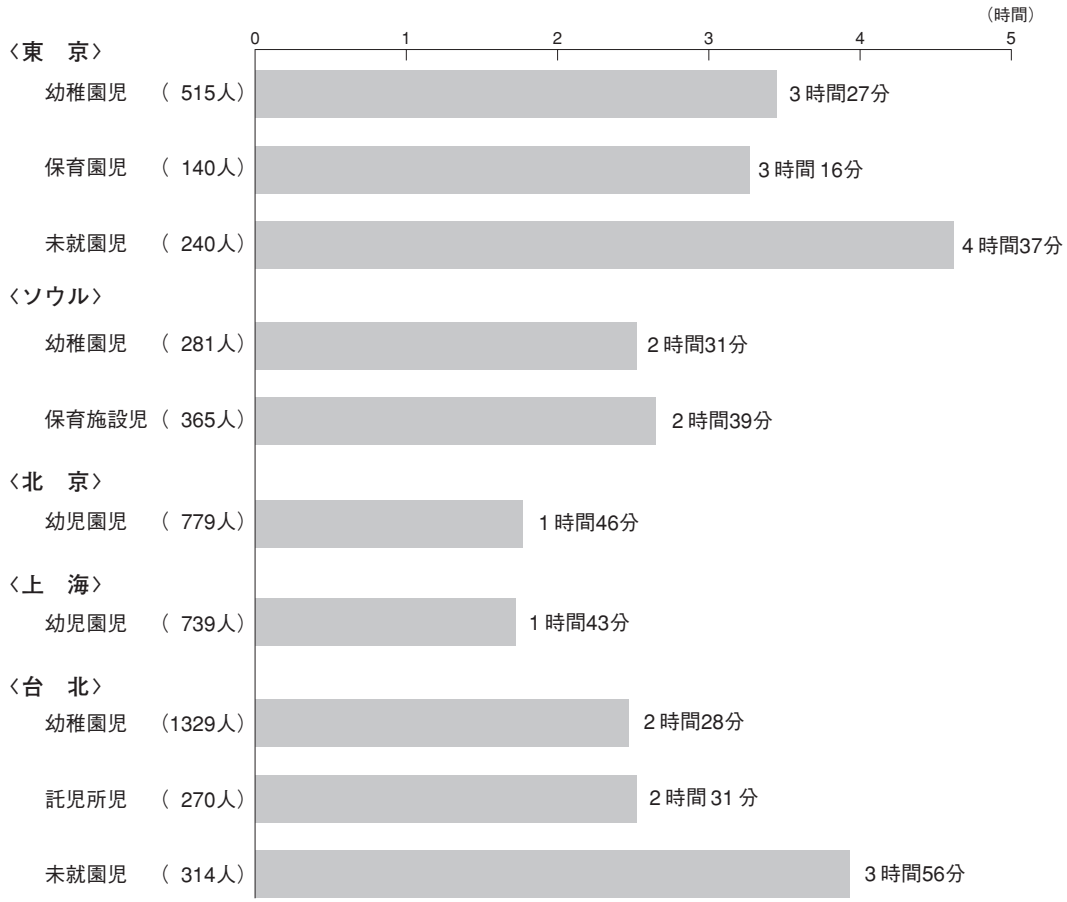
■図１－３－３　テレビ・ビデオ・DVD（VCD）の平均視聴時間（種類別）



注１）北京、上海、台北では、ビデオの代わりにビデオCD（VCD）およびDVDが普及しているため「ビデオ」視聴時間はたずねていない。

注２）「テレビ」「ビデオ」「DVD（VCD）」を使う頻度に関する設問で「ごくたまに」「ぜんぜん使わない・使わせない」「家にない」と回答した場合は、「0時間」として平均視聴時間を算出した。なお、いずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。

■図１－３－４　テレビ・ビデオ・DVD（VCD）平均視聴時間（就園状況別）



注１）東京、ソウルは「テレビ」「ビデオ」「DVD（VCD）」視聴時間の和。北京、上海、台北は「テレビ」「DVD（VCD）」視聴時間の和（これらの地域では、ビデオの代わりにビデオCD（VCD）およびDVDが普及しているため「ビデオ」視聴時間はたずねていない）。

注２）「テレビ」「ビデオ」「DVD（VCD）」を使う頻度に関する設問で「ごくたまに」「ぜんぜん使わない・使わせない」「家にない」と回答した場合は、「0時間」として平均視聴時間を算出した。なお、いずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。